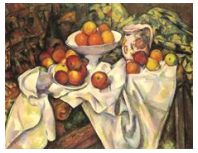
中華民国～現代（1912～）ー年表ー

黒色は中国史、赤は書道史、紫は世界史、青は日本史

1896年　楊見山没　任伯年没
英国のジョセフ・ジョン・トムソン、電子を発見　大韓帝国成立
1897年　4月～8月、アメリカ・スペイン・キューバ戦争　桑名鉄城、明清の名品を蒐集
1898年　4月、山東で義和団事件　**甲骨文発見**される　10月、第2次ボーア戦争　米比戦争
1899年　6月、義和団、北京列国公使館包囲、清朝列国に宣戦　量子論　スタイン（英）中央アジア探検
1900年　潜水艦ホーランド号就航
1901年　9月、辛丑条約締結。　**西域（敦煌・楼蘭など）で肉筆資料発見**　ヘディン（ス）楼蘭発掘
ノーベル賞設立　日本で、書道会の創設が盛んになる
1902年　8月、学堂章程発布　魯迅、日本に留学　1月、日英同盟成立　呉大澂没　大谷光瑞、第一次探検
5月、キューバ、スペインから独立　長尾雨山、上海で働く
1903年　ロシア軍、満洲を占領　劉鶚、『鉄雲蔵亀』を公刊　泉屋博古館の住友春翠、青銅器を蒐集
ライト兄弟飛行機を発明　ジャック・ロンドン『野生の呼び声』　パナマ独立
1904年（光緒30年）　2月、**日露戦争勃発（～05）**、中国は中立宣言　米国のルーベル、紙への平版オフセット印刷発明
翁同和没　丁仁・王禔・葉銘・呉隠の提唱で杭州に**西泠印社発足**
1905年　8月、東京で中国同盟会成立　9月、科挙廃止　9月、ポーツマス条約
アインシュタイン「特殊相対性理論」　夏目漱石『我輩は猫である』
マチスらのフォーヴィスム　ドビュッシーの全音音階　表現主義
12月24日、世界初のラジオ放送（米国）　ソシュールの言語学
1906年　4月、京漢鉄道全線開通　6月、日本、南満洲鉄道株式会社設立　セザンヌ没
1907年　革命派の武力蜂起相次ぐ　セザンヌの没後初の回顧展　リルケ『新詩集』　キュビスム　ゴーリキー『母』
1908年　**宣統帝即位**　各省で国会開設運動　プラスチックの発明　シェーンベルクの無調音楽
ペリオ（仏）敦煌発掘開始　『龍眠帖』中村不折　日本人のブラジル移民開始
1909年　10月、伊藤博文暗殺される　大谷探検隊、楼蘭で「李柏文書」発見　未来派（伊）
1910年　8月、日本、朝鮮を併合　南アフリカ連邦、イギリスから独立　トルストイ没
カンディンスキーによる最初の抽象絵画　ヘルマン・ヘッセ『春の嵐』
12月、石川啄木『一握の砂』（明治43年）　内藤湖南、北京訪問
1911年　10月、**辛亥革命。清滅亡**　羅振玉、安陽に殷墟を確認　ロシア・アヴァンギャルド
アムンゼン南極探検　ストラヴィンスキーの原始主義　中国から碑版法帖が、
日本や世界に大量流失　羅振玉、王国維とともに日本に亡命し京都に七年間滞在
1912年　1月、**中華民国南京臨時政府成立**　孫文、臨時大総統に就任
3月11日中華民国臨時約法公布（アジアで最初の共和制国家の憲法）
袁世凱、北京で臨時大総統に就任　12月、選挙で国民党圧勝　日本、大正に改元
1913年　3月、宋教仁、暗殺される　9月、第2革命敗北、孫文ら日本へ亡命
プルースト『失われた時を求めて』　**構成主義（ロシア）**　バルトークの民族主義
10月、袁世凱、大総統に正式就任　呉昌碩、西泠印社社長に
1914年　7月、孫文、東京で中華革命党を結成　郭沫若、日本へ留学
7月、**第一次世界大戦開始**　パナマ運河開通。
8月、日本、対独宣戦　11月、日本軍、青島占領
1915年　1月、日本、対華21ヵ条要求提出　9月、陳独秀、『青年』（のち「新青年」）創刊
袁世凱、帝政復活宣言　12月、反袁世凱の第3革命勃発
カフカ『変身』発表　アインシュタイン「一般相対性理論」
芥川龍之介『羅生門』　和文タイプライターの発明　楊守敬没
1916年　袁世凱、皇帝に即位、3月、退位　6月、袁世凱死去　**「ダダ」**発生
軍閥割拠の時代へ（以後北伐終了までの10年余）　胡適ら「文学革命」提唱
1917年　8月、北京政府、対独宣戦　9月、孫文らの広東軍政府成立　文学革命運動おこる
11月、**ロシア10月革命　北イエメン、オスマン帝国から独立**　内藤湖南、北京訪問
1918年　6月、魯迅『狂人日記』発表　ボルシェビキ、党名を「ロシア共産党」と改名
8月、日本、シベリア出兵宣言　富山の米騒動　11月、**世界大戦終了**

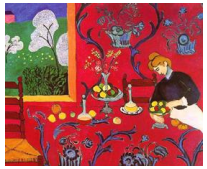

セザンヌ「リンゴとオレンジ」
1900年ころ

アインシュタイン

世界初の有人飛行
（1903年12月17日）
ライトフライヤー号

ピカソ　1907年
「アヴィニョンの娘たち」

敦煌、莫高窟を調査中のポール・ペリオ
1908年


マチス　1908年
「赤のハーモニー」

カンディンスキー「水彩による始めての抽象画」1910年

クレー「色の形」
1914年
（表現主義）

マルセル・デュシャン
「ファウンテン」
1917年（ダダ）

1919年（民国8年）1月、**パリ講和会議**　ドイツ共産党・スパルタクス団成立
3月、朝鮮で三一民族独立運動開始　ガンジーら非暴力運動開始
五四運動始まる　中国国民党成立　アフガニスタン、英国から独立
1920年　1月、国際連盟成立　アメリカ、ジャズ・エイジ　アール・デコ（～30年代）
1921年　7月、中国共産党成立　上海の経済、飛躍的に発展　ワシントン会議
7月、モンゴル、中華民国から独立　新造形主義（モンドリアン）
1922年　7月、日本共産党成立　ジェームス・ジョイス『ユリシーズ』
エジプト、英国から名目上独立
1923年　9月、関東大震災（大正12年）
1924年　1月、広州で国民党第1回全国代表大会、第1次国共合作　レーニン没
スターリン粛清　アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言』
トーマス・マン『魔の山』（1924年）　11月、溥儀、紫禁城を出る
1925年（民国14年）3月、孫文病死　5月、五三〇事件　イラン、英国から独立
3月、日本、治安維持法、普通選挙法、国会通過
日本でラジオ放送開始（大正14年）10月、紫禁城、故宮博物院となる
1926年　7月、蒋介石の北伐始まる　米国、液体燃料による最初のロケット打ち上げ（ロバート・ゴダード）
10月、アーネスト・ヘミングウェイ『日はまた昇る』　カナダ、英国より独立
1927年　4月、蒋介石、反共クーデター（上海）　8月、八七会議（共産党武装暴動路線へ）
3月、康有為没（70歳）　11月、呉昌碩没（84歳）　ハイデッガー『存在と時間』
7月、芥川龍之介自殺（昭和2年）　殷墟の科学的発掘行われる　居延漢簡発見
王国維、自殺
1928年　2月、郭沫若、日本へ亡命　6月、北伐軍、北京占領　張作霖、爆殺される
テレビの実験放送（米国）　D・H・ローレンス『チャタレイ夫人の恋人』
7月、国民政府不平等条約廃棄を宣言　12月、張学良、国民政府に合流　ムスリム同胞団設立
1929年　10月、**世界恐慌**始まる　レマルク『西部戦線異常なし』
1930年　4月、中原大戦　12月、蒋介石、ソビエト区包囲攻撃　中国左翼作家連盟成立
1931年　9月、満州事変勃発　日本帝国の大陸侵略　ウィリアム・フォークナー『サンクチュアリ』
1932年　1月、上海事変勃発　3月、「満州国」建国宣言　茅盾『子夜』　文学大衆化運動
5月、日本、五一五事件　ヤスパース『哲学』　イラク王国、英国から独立　社会主義リアリズム（ソ連）
サウジアラビア王国成立　2月、満州国、中華民国から独立（日本の傀儡国家）
1933年（民国22年）1月、ヒットラー政権成立　2月、国際連盟、満州国不承認決議、日本は脱退
巴金『激流三部曲の家』　北京故宮博物院の文物大移動、後、台湾へ移される
溥儀、満州国皇帝に即位　10月、長征始まる
1934年　3月
1935年　1月、遵義会議　3月、ドイツで世界初のテレビ放送開始
7月、コミンテルン、反ファシズム統一戦線8月、八一宣言発表
1936年　2月、日本、二二六事件　7月、スペイン内乱
老舎『駱駝祥子』　10月、魯迅没（55歳）12月、西安事件
フランスやスペインで「人民戦線」成立　11月、日独防共協定　書道博物館創設（中村不折）
1937年　7月、盧溝橋事件　9月、第2次国共合作　12月、南京大虐殺　郭沫若『屈原』
、ドイツのオットー・ハーン、核分裂反応発見
ウォーレン・ウィーバー分子生物学の提唱　リーゼ・マイトナー、「質量とエネルギーの等価性」実証
1938年
1939年　9月、独軍ポーランドに侵入、**第2次世界大戦開始**
1940年　1月、毛沢東『新民主主義論』　9月、日独伊三国同盟調印　羅振玉没
1941年　12月、国民政府、日独伊に宣戦　真珠湾攻撃　12月、アジア**太平洋戦争開始**
1942年　2月、延安整風運動　郭沫若『屈原』　毛沢東『文芸講話』　カミュ『異邦人』
6月、ミッドウェー海戦　独、世界初の弾道ミサイルV2打ち上げ（ブラウン等）
1943年　2月、スターリングラードで独軍降伏　11月、カイロ会談（米・英・中）　宮島詠士没

テレヴィジョン

ピカソ「ゲルニカ」1937年

V2ロケット

北京故宮博物院

マックス・エルンスト 1924年
「女性、老人と花」
シュルレアリスム

モンドリアン
「コンポジション」
１９２１年

ガンディー

1944年
『生命とは何か』シュレーディンガー　レバノン、フランスから独立
ルイス・ボルヘス『伝奇集』

1945年
4月30日、ヒットラー自殺　5月、**独軍降伏**　ジョージ・オーウェル『動物農場』
7月16日、米国で**人類初の原子爆弾実験**　8月6日、広島へ原爆投下（人類初）
8月9日、長崎へ原爆投下（人類最後）　9月、ベトナム、フランスから独立宣言
8月、重慶会談（蒋介石と毛沢東）　**日本、無条件降伏**　朝鮮、日本から独立

1946年
11月、日本国憲法公布　サルトル『実存主義とは何か』　4月、シリア、仏国から独立
5月、ヨルダン、英国から独立　7月、フィリピン、独立　抽象表現主義（米国）
第一次インドシナ戦争　アンフォルメル芸術（仏国）
アクションペインティング（米国）　**コンピュータ誕生**（米国）

1947年
2月、台湾で反政府暴動　3月、トルーマン・ドクトリン発表
インドとパキスタン、イギリスから独立　第一次印パ戦争

1948年
1月、ガンディー暗殺される　11月～49年1月、三大戦役（国共内戦）　スリランカ独立
5月、イスラエル独立　第一次中東戦争　ビルマ、英国から独立
ミュージックコンクレート（仏国）　朝鮮半島、分断国家成立（大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国）

1949年
10月1日、**中華人民共和国成立宣言**、中国科学院設立　12月、蒋介石、台湾へ
4月、北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）成立　8月、ソ連、原子爆弾実験
インドネシア、オランダから独立　カラー・フィールド・ペインティング（米国）

1950年
2月、中ソ友好同盟相互援助条約調印　6月25日、**朝鮮戦争勃発**　米国でロック誕生
6月、日本、レッドパージ　8月、警察予備隊令公布　チベット虐殺

1951年
3月、ソ連初の中央テレビ局創設　**米国、世界初の原子力発電**に成功　カミュ『反抗的人間』
9月、サンフランシスコ講和条約・日米安保条約調印　セリー音楽、電子音楽
12月、人民解放軍ラサに進駐　三友運動　12月、リビア、イタリアから独立

1952年
4月7日、日本、「鉄腕アトム」の連載開始　ケージの偶然性の音楽、シェフェールの具体音楽
10月、イギリス、原子爆弾実験　11月、米国、人類初の水爆実験
ジョン・ガードン（英国）、最初のクローンをつくる（オタマジャクシ）

1953年
2月、日本、ＮＨＫがテレビ放送開始　ロラン・バルト『零度のエクリチュール』
5月、ヒラリーらエベレスト初登頂　8月、ソ連、初の水爆実験
7月、朝鮮戦争休戦協定　世界初の電子音楽（シュトックハウゼン）
10月、ラオス、仏国から独立　米国のアイゼンハワー大統領、国連で「核の平和利用」演説
11月、カンボジア、仏国から独立　ＤＮＡの二重らせん構造発見
第一次五ヶ年計画　巴金『激流三部曲の春』　10月、鄧散木没

1954年
3月、第5福竜丸被爆　9月、中華人民共和国憲法公布　日本、自衛隊発足
ソ連、世界初の実用原子力発電開始（オブニンスク）アルジェリア独立戦争
簡体字の採用　台北故宮博物院完成　フランス、東南アジアから撤退
原水爆禁止世界大会　レヴィ・ストロース『悲しき熱帯』
バンドン会議　ベトナム南北に分裂　4月、アインシュタイン没

1955年
2月、スターリン批判　10月、ハンガリー動乱　エルヴィス・プレスリー（米国）
英国、世界初の商用原子力発電所がセラフィールドに完成　スエズ動乱
スーダン、イギリスとエジプトから独立　モロッコとチュニジア、仏国から独立
水俣病、発生確認

1956年
9月、斉白石没　10月、ソ連、世界初の人工衛星（スプートニク1号）　コンピュータ音楽
11月、イギリス、初の水爆実験　マレーシア、英国から独立　ガーナ、英国から独立
4月、キング牧師暗殺される　9月、中国、テレビ放送開始　人民公社発足
第二次五ヶ年計画　10月、ギニア、仏国から独立

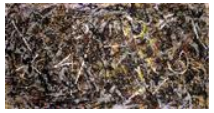
1957年

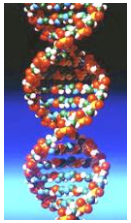
1958年

キノコ雲（長崎）

デュビュッフェ
「食べる女」1944年

フランツ・クライン
「チーフ」1950年


ジャクソン・ポロック
「錬金術師」1947年


ＤＮＡの模型

井上有一「愚徹」
1956年

スプートニク１号

「大躍進」にともなう大飢餓発生　キューバ革命

1959年

1960年
1月、日本、新安保条約調印　2月、フランス、原子爆弾実験　中ソ対立公然化
グアテマラ内戦　12月、**ベトナム戦争**　ライヒらのミニマル・ミュージック
アフリカの年　仏領カメルーン独立　セネガル、トーゴ、マダガスカル、ベナン、ニジェール、ブルキナファソ、コートジボワール、チャド、中央アフリカ共和国、コンゴ、ガボン、マリ、モーリタニア、仏国から独立　ナイジェリア、英国から独立　英領ソマリランド独立　イタリア領ソマリア独立、ソマリランドと結合してソマリアになる　キプロス、英国から独立
12月14日、国連、植民地独立付与宣言可決　エリアス・カネッティ『群衆と権力』

1961年
4月、ソ連、ガガーリン、世界初の有人宇宙飛行（ボストーク1号）　ヘミングウェイ自殺
クウェート、英国領カメルーン、シエラレオネが英国から独立　ポップ・アート（米国）
ジョン・ケージ『サイレンス』

1962年
10月、キューバ危機　レイチェル・カーソン『沈黙の春』　ビートルズ（英国）
レヴィ・ストロース『野生の思考』　安部公房『砂の女』　サモア独立
ウガンダ、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ、英国から独立
ルワンダ、ブルンジ、ベルギーから独立　アルジェリア、仏国から独立

1963年
8月、米・英・ソ、部分的核実験停止条約（ＰＴＢＴ）に調印　原水爆禁止世界大会分裂
日本、初の原子力発電開始（東海村の東海発電所）　ケニア、英国から独立

アンディ・ウォーホル
「グリーン・マリリン」
1962年

1964年
10月、中国、初の原爆実験　于右任没　マラウイ、ザンビア、英国から独立　世界初のワープロ
ミニマル・ミュージック（米国）

1965年
2月、米軍、北ベトナム爆撃開始　6月、日韓条約調印　11月、**文化大革命**はじまる。
第2次印パ戦争　ローデシアが英国から独立宣言　ガンビア、モルディブ、英国から独立
ミシェル・フーコー『言葉と物』　シンガポールがマレーシアから独立
ミニマル・アート（米国）　世界初のアナログシンセサイザー

1966年
8月、天安門広場で紅衛兵百万人集会　老舎没　10月、中国初の核ミサイル実験
ボツワナ、バルバドス、英国から独立　レソト、イギリス連邦自治国に
イギリス領ギアナ、ガイアナとして独立　コンセプチュアル・アート

フランク・ステラ
「ヒラクラⅢ」1968年

1967年
6月、中国、初の水爆実験　ナイジェリア内戦　ガルシア・マルケス『百年の孤独』
南イエメン、英国から独立　ヒッピームーブメント（米国から全世界へ）

マーク・ロスコ
「無題」1968年

1968年
5月、フランスで**「五月革命」**　ナウル、英連邦として独立　8月、フランス、初の水爆実験
9月、スワジランド、英国から独立　10月、赤道ギニア、スペインから独立

1969年
8月、ソ連・東欧軍、チェコスロバキアへ侵入、「プラハの春」終る　10月、劉少奇、永久除名処分
3月、ウスリー河で中ソ両軍衝突　11月、佐藤・ニクソン共同声明、沖縄返還　石牟礼道子『苦海浄土』
7月20日、**人類初の月面着陸**（米国、アポロ11号）
8月、ウッドストック・フェスティバル（米国）　フィリピン戦争

1970年
電子音楽グループ、クラフトワーク結成（独国）
フィジー共和国、英連邦王国として独立　トンガ、英連邦に加盟

月面着陸

1971年
9月、林彪事件　10月、中国、国連代表権獲得　沈尹默没
第3次印パ戦争　アミンの虐殺（ウガンダ）　ユネスコ「人間と生物圏計画」
バーレーン、カタール、アラブ首長国連邦、オマーン、英国から独立
バングラデシュ、パキスタンから分離

1972年
9月、田中首相訪中、**日中国交樹立**　馬王堆漢墓発掘　銀雀山竹簡発掘　緑の党結成（豪州）

イサム・ノグチ
「エナジー・ヴォイド」
1971年

1973年
「批林批孔」盛ん　ピノチェトの虐殺（チリ）　バハマ、英国から独立
オイルショック　世界初の携帯電話（米国）

1974年
4月、カーネーション革命（ポルトガル）5月、インド、初の核実験　秦始皇帝兵馬俑発見
ギニアビサウ、ポルトガルから独立　グレナダ、英国から独立

1975年
4月、蒋介石没　**ベトナム戦争終了**　ポルポトによる虐殺（カンボジア）　レバノン内戦
モザンビーク、アンゴラ、サントメ・プリンシペ、カーボベルデ、ポルトガルから独立
ポルトガル、東ティモールから撤退　スペイン、西サハラから撤退　コモロ、仏国から独立
オランダ領ギアナ、スリナムとして独立　パプアニューギニア、オーストラリアから独立

1976年
雲夢睡虎地秦漢古墓より竹簡出土　世界初のパソコン（米国）
4月、四五事件　9月、毛沢東没　10月、四人組逮捕、**文化大革命終結**　ベトナム、南北統一

パソコン

1977年
7月、鄧小平復活　『新簡体字表』　ジブチ、仏国から独立　モザンビーク内戦（～１９９２年）
擂鼓墩発掘　中山国王の陵墓の発見　金文の考釈、文字学の発達

1978年　6月、郭沫若没　12月、経済開放政策へ　日本分子生物学会結成　初の日本語ワープロ
ドミニカ国、ツバル、英連邦王国として独立
ソロモン諸島、英連邦王国として独立　イラン革命

1979年　2月、中越戦争勃発　3月、「北京の春」終わる　キリバス、英国から独立
3月、米国、スリーマイル島原子力発電所事故　12月、ソ連、アフガニスタン侵攻
セントルシア、セントビンセント・グレパソコンナディーン、英国から独立　エルサルバドル内戦

1980年　9月、イラン・イラク戦争　メスナー、エベレスト、単独で初登頂　バヌアツ、英連邦加盟国として独立
ポーランドで「連帯」結成　ソ連、サハロフ流刑　緑の党結成（独）

1981年　マーティン・エバンスら、マウスのＥＳ細胞発見　3月、茅盾没
5月、中国書法家協会成立　ベリーズ、アンティグア・バーブーダ、英国から独立

1982年　ワープロ一般に普及　中国、全国で公募展が開催され、日本の書道団体との交流も盛んになる
張大千、台湾で没　セントクリストファー・ネイビス、英国から独立　初のデジタルシンセサイザー

1983年　スリランカ内戦　第2次スーダン内戦　東西対決、世界大戦争の恐怖　「核の冬」　世界的反核運動

1984年　安部公房、日本人初、ワープロで小説を執筆　日本初のインターネット　ブルネイ、英国から独立
ソ連、ペレストロイカ

1985年　4月、ソ連、チェルノブイリ原子力発電所事故　全地球的な核汚染（地球被曝）　サハロフ流刑解除

1986年　ミクロネシア連邦、マーシャル諸島、米国から独立　ソ連、グラスノスチ
米国のチャック・ハル、３Ｄプリンターの特許取得、実用化始まる
モントリオール議定書　携帯電話一般に普及

1987年　6月4日、天安門事件、民主化運動弾圧　高行健『霊山』　ポーランド人民共和国解体

1989年　11月、ベルリンの壁倒壊　**東欧革命**　12月、マルタ会談　**（冷戦終結宣言）**　リベリア内戦

1990年　3月、ナミビア、南アフリカ共和国から独立10月、東西ドイツ統一　ルワンダ内戦

1991年　1月、**湾岸戦争**　南オセチア紛争
12月、中国初の原子力発電所、送電開始（秦山原発）　スロベニア紛争　7月、ワルシャワ条約機構廃止
12月、**ソ連崩壊**　（アルメニア、アゼルバイジャン、グルジア、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、キルギスタン、カザフスタン、エストニア、ラトビア、リトアニア、ベラルーシ、ウクライナ、モルドバが独立、残りはロシア連邦に）　ユーゴスラビア紛争（～２０００年）
チェチェン紛争　対イラク経済制裁　ソマリア内戦　クロアチア紛争（～１９９５年）

1992年　1月、鄧小平「南巡重要講話」、市場経済化の加速　ボスニア・ヘルツェゴビナ内戦（～１９９５年）
3月、野のはな書道会創立　沙孟海没　世界中に核兵器が拡散　東欧、脱共産化　リオで「地球サミット」
10月、中国共産党第14回党大会で「社会主義市場経済」の確立をうたう　タジキスタン内戦

1993年　ブルンジ内戦　エリトリア、エチオピアから独立　ジーン・シャープ『独裁体制から民主主義へ』　ＥＵ発足
4月、秦山原子力発電所、営業開始　パラオ、米国から独立　コンゴ内戦　ルワンダ大虐殺

1994年　3月、東京で地下鉄サリン事件（オーム真理教）　インターネット、一般個人に爆発的に普及
クローン羊ドリー誕生　パレスチナ自治政府発足　ネパール紛争

1995年　7月、英国、香港を中国に返還　董寿平没　ル・クレジオ『歌の祭り』　12月、「京都議定書」

1996年　高行健『ある男の聖書』　10月、オトポール！設立　5月、インド、初の原爆実験

1997年　パキスタン、初の原子爆弾実験　9月、日本、東海村ＪＣＯ臨界事故

1998年　ジェームス・トムソン、ヒトＥＳ細胞をつくる　エリトリア紛争

1999年　12月、ポルトガル、マカオを中国に返還　マルク紛争　コソボ紛争（～２０００年）

2000年　10月、高行健、ノーベル文学賞　ヒトの全ゲノムほぼ解読　ブルドーザー革命（セルビア）

2001年　6月、上海協力機構設立　パソコン普及率５０％を超える

2002年　5月、東チモール、インドネシアとポルトガルから独立　マケドニア紛争　ワープロの生産終了

2003年　10月、中国、有人宇宙飛行に成功（神舟５号）　カルタヘナ議定書締結　バラ革命（グルジア）

2004年　オレンジ革命（ウクライナ）　フェイスブック誕生、世界最大のＳＮＳに

2005年　10月、巴金没　劉炳森没　啓功没　チューリップ革命（キルギス）

2006年　10月、朝鮮民主主義人民共和国、初の原子爆弾実験

2007年　米国と日本で皮膚からｉｐｓ細胞がつくられる　8月、初音ミク発売

2008年　ロシア・グルジア戦争

2009年　8月　日本、パソコン普及率８７．２％

2010年　12月、ジャスミン革命（チュニジア）**アラブの春**（中国などへも影響）

2011年　1月、エジプト革命　シリア内戦
3月11日、福島第一原子力発電所事故　東日本大震災
7月、南スーダン、スーダンから独立　スマートフォン普及

日本語ワープロ

ケイタイ

３Ｄプリンター

ドリー

パソコン

初音ミク

スマホ

我われは、どんな世界に暮らしているのか

20世紀とはどのような時代だったのか。見方はプリズムのように時代を分光する。

それは戦争の世紀。戦争が世界的規模で行なわれ、飢餓と差別と大量虐殺の時代。

科学技術の進歩と物質的豊かさの世紀。人類の、あらゆる難問が、科学の進歩によって解決されると夢みた世紀。

世界の滅亡に恐怖する核の時代。なんでもかんでも革命の時代。「共産主義つなみ」の時代。

戦争は、民主主義とファシズムと共産主義勢力との争いかと思っていたら、そうではなかった。

それは、民主主義と全体主義の争いであった。民族紛争の時代。群衆の時代。

アジア・アフリカ・中南米・オセアニアの民族独立と植民地解放の時代。

白人支配に対する有色人種の戦いの世紀。女性解放の時代。

宇宙時代。

我われは何処へ行くのか。

孫文

１９１２年1月1日、アジアで最初の共和国である中華民国が成立した。

臨時大総統の孫文は総統就任演説で「・・・満清専制政府を転覆し、中華民国を強固にして、民生の幸福を謀るは、これ国民の公意なり。われはまことにこれに遵いて以て国に忠、衆のために服務せん」と誓った。

辛亥革命は、２０００年以上つづいてきた中国の専制体制に終止符を打ち、漢、満、蒙（モンゴル）、回（ウイグル）、蔵（チベット）の「五族共和」を実現した。しかし、古い体質の官僚や軍人たち、革命派の勢力争いのなか、革命は簡単には実現できなかった。袁世凱の独裁がはじまり、民の国とは名ばかりで、暗黒時代に陥っていった。

そのような状況のなか、「真正の共和国」をめざして陳独秀が立ち上がった。

彼は旧中国をささえてきた伝統思想と文化は、奴隷的、保守的、退隠的、鎖国的、虚飾的、空想的で封建的な劣悪なものであるとし、それらを徹底的に否定し、西欧近代文化の自主的、進歩的、進取的、世界的、実利的、科学的で民主的なすぐれたものを中国に移植しようとした。彼は西欧近代思想の「民主と科学」を旗印にし、暗黒中国を作り出している元凶は儒教であるとして、これに攻撃を加えた。この主張は多くのインテリや学生に歓迎された。

陳独秀

１９１９年から２０年にかけて、新文化運動と五四運動から生まれた新しい知識人たちが、中国の根本的な改造をめざしてマルクス主義に接近していった。彼らは、１９２１年7月、陳独秀や李大釗を中心として、コミンテルンの指導の下、中国共産党を正式に成立させた。わずか57名の組織であった。

一方、孫文は１９１９年10月に自派の中華革命党を中国国民党に改組した。

１９２１年4月には中華民国正式政府を樹立し、北伐を準備していた。１９２２年、陳独秀らは反対したが、コミンテルンの強制で、共産党員が国民党に加入して国民党と協力関係を持つことになった。（国共合作）

李大釗

このような状況の中、呉昌碩ら芸術家たちは、時代に翻弄されながら生きぬいたのであった。

呉昌碩は鄧石如→包世臣→呉譲之→趙之謙と、つづいてきた碑学派の伝統である「逆入平出」の筆法を引き継いだ。

呉昌碩は革命や変革には反対であったようだが、清朝の遺民といったところだろうか。本当の革命とは、政治革命以外のところにあるのかもしれない。

呉昌碩

呉昌碩　１８４４年9月12日（道光24）～１９２７年11月29日（民国16）

呉昌碩は清末民初に活躍した篆刻家・書家・画家・詩人。
詩書画篆刻の「四絶」といわれ、中国最後の文人とも称えられている。
浙江省湖州府安吉県鄣呉村の出身。

名は俊、または俊卿。字は香圃、昌石、昌碩など。１９１２年（民国元年）以降、昌碩を名とした。
号は缶廬、老缶、缶翁、苦鐵、石尊者、石人子、聾缶、大聾、破荷など

著書に『缶廬集』、『缶廬詩』、『缶廬印存』など

曽祖父、祖父、伯父、父、と代々挙人となる読書人の家系で育った。※「挙人」とは郷試に合格した者のこと
父（呉辛甲）は下級官吏　呉昌碩は幼少のころから、父に篆刻を習ったという
家はたいへん貧しかったが、16歳頃までは、平和のうちに、伸び伸びと、育ったようである

血統や素性を知ったところで、芸術家と、その作品を理解できるわけでもなし、かえって、偏見によって真実から遠ざかるだけかもしれない　我われは、芸術に何を求めているのだろうか？

１８６０年（咸豊10年・17歳）故郷に太平天国軍が侵入、
清軍があとを追ってきて、両軍ともに、
放火略奪強姦とあらゆる悪事をはたらき、
住民は四方へ逃亡、呉昌碩も父と逃げていたが、
はぐれて一人になってしまった。彼はあちこち放浪して、
2年後、故郷に帰り、家族に再会したが、許婚の章氏が飢えと心労で死んでいた。つづいて秋に母が病死した

「江南鉄涙図」より
寄雲山人撰（咸豊年間刊）

飢餓のため、多くの嬰児が水中に棄てられた。

１８６３年（同治2）また軍隊が侵入し、一家は再び離散し、戦乱のなか、祖母、兄二人、弟、妹が死んだ
１８６４年の秋、各地をさまよって故郷に帰りついた呉昌碩は、はじめて家族の死を知ったようである。家族は父と子の二人だけになってしまった。呉昌碩は21歳である　5年ほどの離散の間に、4千人余いた村民のうち生存者は、呉昌碩父子を含めて25人だけであった
１８６５年、父が再婚し、共に安吉に移住。秋、秀才となったが、その後、科挙のための学問はやめ、詩・書・篆刻や金石学の学習に専念し、科挙の試験は受けなかった。　※「秀才」とは、郷試の受験資格を得た者のこと
１８６８年、父が死んだ。翌年、継母を残して、杭州へ遊学し、詁経精舎に入る。※「詁経精舎」は阮元が設立１８６９年、安吉に帰り、塾を開いて、独学。　１８７２年（29歳）施氏と結婚　この後の10年間は、上海や蘇州や杭州に遊び、師や友を訪ね、大いに学んだこの間に、楊見山、呉大徴、任伯年、沈石友らと知りあい、見聞を深めた　１８８２年（光緒8）故郷で暴動がおこり、
継母、妻、二人の子と蘇州に移住　蘇州では売芸生活をしたが、
生活は苦しく、見かねた友人が低い官職を買ってくれた。
金傑から古瓦缶を贈られ、缶廬と号す。
１８９４年（51歳）、呉大徴の幕臣になり日清戦争に参戦
翌年、南に帰った　１８９９年（56歳）安東県令に任せられたが、一ヵ月で辞任
１９０３年（60歳）、継母の楊氏が死んだ　１９０４年、丁仁・呉隠・葉品三・王福庵らが西泠印社を結成し、
呉昌碩も協力することを約束した。１９１０年（宣統2）上海で中国書画研究会（後の海上題襟館金石書画会）
設立に参画　１９１１年（宣統3）夏、公職を離れて上海に定住（68歳）、辛亥革命
１９１２年（民国元）日本ではじめて呉昌碩の作品集『昌碩画存』が刊行された　字の昌碩を名とした
１９１３年（民国2）西泠印社の初代社長になる（70歳）
上海山西路吉慶里に転居　「上海書画協会」社長になる
70代が最も作品数が多く、質も高い
１９１４年（民国3）上海六三園で**中国絵画史上初の個展**開催
１９１７年（民国6）施夫人が死んだ。（昌碩は74歳）
１９２７年（民国16）中風が悪化し病没、84歳　絶筆は蘭の画。

任伯年「酸寒尉像」
1889年、呉昌碩46歳

私生活では、息子の借金の返済や夫人の医療費のために苦労が絶えず、本人も足が不自由になり、耳がよく聞こえない状態だった

1923年頃の西泠印社

呉昌碩の篆刻　彼の書画の根底には篆刻があると言われる。毛筆表現と刻画表現。

呉昌碩は幼少から篆刻に親しみ、日記を書くように石を刻した。

はじめ、浙派（西泠印派）や皖派の作風を学び、鄧石如、古印の模刻や、呉譲之・趙之謙や徐三庚の作風を学んだ。その後、封泥や漢魏の甎の文字などを見て、40代に独自の様式を創造し、晩年には秦漢の金石を取り入れ、加齢とともに円熟していった。篆刻界では呉昌碩の刻風を呉派という。

27歳の時『樸巣印存』を編集、また、30代前半までの印を集めた『蒼石斎篆印』も編集している。

1876年（光緒2）33歳のとき『斉雲館印譜』を編集。

『斉雲館印譜』

「斎雲館」1876年

「安吉呉俊長寿日利印」1876年

まだ、独自性は希薄。呉譲之など鄧派の刻風か。

1883年（光緒9）頃、『削觚廬印存』を編集。これには30代後半からの印を収めている。

呉昌碩の印は日本人にも人気があって、日下部鳴鶴、犬養毅、富岡鉄斎、内藤湖南、や長尾雨山などが依頼している。

「豪猪先生」3.3角
中村不折のための印。
「豪猪」は不折の別号。

起筆、終筆、転折に細かく刀を入れている。印の縁や点画部を刀で叩いて古色を出している。「豪」の上部を削って、「先」の上部と揃えている。右に流れる「豪」を「猪」の「犭」の左下部を太くして左に引っぱっている。右に流れている左行を、「生」の横画の起筆を太くして支えている。
（東博の解説より）

「邨鉎」3.3角
中村不折のための印。
不折の本名の中村鉎太郎（さくたろう）の村（邨）と鉎を刻したもの。
起筆、終筆部や邨の口の内側などは、小刻みに刀を入れている。縁は下辺を太くして全体を安定させ、刀で叩いて古色を出している。左上部に筆画を集め、右下部に余白を作る粗密による対比の構成。
「邨」は右へ、「鉎」は左へ傾けた構成だが、右下部の縁が「邨」を支え、「鉎」を金偏の下部の左側の点を左側へ引っ張り、最下部の横画の終筆を右下がりにして支えている。（東博の解説より）

「邨鉎」印の側款「缶」
印材上面に、単入刀法で刻されている。

「豪猪先生」印の側款「老缶」
印材上面に側款として刻されている。

呉昌碩の篆刻法の特徴

鈍刀を使った（鈍刀硬入）。印刀の軸が円筒（円幹）。絵と同じ力の均衡による章法。筆による潤渇を併筆、欠画で表現。印の輪郭を表現に取り込む。刻の深さは浅め（約1ミリ）

力強く、バランスが良い。考え抜かれた緻密な構成。

「明月前身」1909年66歳
界格からはみ出して構成されている（穿挿避譲法）

側款；趙之謙のまねをして、方罫に陽文で印記を刻している。許婚の章氏が病死したのは、呉昌碩が19歳の時だった。それから22年後に夢に現れた章氏を想い、「感夢」という題の詩を作ったが、また、47年後に夢に章氏をみて、この印を刻した。

側款；趙之謙のまねをして、夢に現れた許婚の章氏の背面像を刻している。

側款
己酉春仲客呉下老缶年六十有六

「園丁生于某洞長于竹洞」
60歳以降の制作

常識を破る字法。

「丁」は象形、「生」と「于」は合文、「某」は「梅」の古文、「長」は古鉥、「洞」のサンズイの印篆を界格の中に自由に構成している。

「鍾善廉」1915年（72歳）
東京国立博物館蔵

70 代の印は、呉昌碩が若いときから追求してきた漢印の風格にたどり着いたようである。

「古拙」といわれる味わいがある。

文字に大小の変化をつける構成法。

『缶廬印存』
1913～14年刊（西泠印社）

呉昌碩篆刻の集大成。30代から 70 代の印が、221 顆収録されている。

「一月安東令」印の側款
1899年（56歳）

舊黄河勢抱安東　古木寒
潭萬影空　臥榻冷懸高士雪
卷茅狂聽大王風　詩来淮上秋山
裏　人在天涯水氣中　眼底石頭
眞可拝　儻容袍笏借南宮　以下不明

旧き黄河の勢い、安東を抱き　古木寒潭、万影空し
榻に臥すれば、冷やかに懸かる高士の雪
茅を巻き、狂って聴く、大王の風
詩は来る淮上、秋山の裏　人は在り、天涯、水気の中
眼底の石頭、真に拝す可し
儻し袍笏を容さるれば南宮に借らん
※大王は漢の劉邦のこと。※石頭は石、米芾の拝石の古事。
※南宮は米芾のこと。

呉昌碩は側款に、思いを込めて、多くの詩文を刻した。

呉昌碩の書

29歳から50歳ころまでは、杭州、蘇州、上海を遍歴し、書道の技術だけでなく、金石学の基礎などを貪欲に学んでいたようである。彼は、形似を求めず、秦漢の意を学ぶことを学書の第一目的とした。しかし、まだまだ、作品は習作の域を出ていない。

初学の頃は顔真卿、鍾繇の楷書を学んだらしい。また後に、趙之謙や北魏の楷書も学んでいる。行書、草書は王鐸、欧陽詢、米芾を学んだようだ。隷書は嵩山石刻、張遷碑、石門頌を学んだが、楊見山、鄧石如、呉讓之の影響が大きい。篆書は楊沂孫の影響が大きいといわれるが、祀三公山碑、石鼓文も学んでいる。

呉昌碩は、鄧石如、趙之謙、何紹基ら碑学派の後に続く者として、秦漢以前の金石文に特に興味を持った。そのような古典文字渉猟のなか、39歳以降の蘇州時代に、王鳴鸞所蔵の「石鼓文」の拓本を見て開眼し、以後、生涯にわたり石鼓文を臨書することになる。

「篆書六言聯」1885年（42歳）

款識は北魏の楷書で書かれている。
呉昌碩独自の書にはほど遠い温和な書風、楊沂孫の亜流である。
石鼓文から集字して書いている。

51歳頃から60代後半頃までに、呉昌碩は独自の書風を創造していった。50代はじめに右臂を痛めたが、この時代、篆刻は最も多作であった。

石鼓文

中国の現存最古の石刻。制作は紀元前４世紀頃？籀文と小篆の中間の形、大篆、籀篆ともいう。約一辺４cmの横長の字形。全文で、７００字以上あるはずと考えられているが、宋拓本で５００字ほどが見られる。今は、傷みがはげしく、２７２字だけになっている。

王侯貴族の狩猟の情景を詠じた四言を基本とした詩が刻されている。直径、高さとも60～70 cmの花崗岩。

初唐の６３０年、陝西省鳳翔府天興県の荒野で10個発見された。その後戦乱のたび、あちこちに運ばれ、その過程で、傷み、第６鼓は上部を削られ、中を抉られて、臼になっていた。清代には故宮に保管されていたが、日中戦争のなか、日本軍による略奪破壊から守るために、上海、南京、宝鶏、漢中、成都、峨嵋へと移転し、また南京に戻り、現在、北京の故宮博物院に保管されている。

北宋代の拓本「范氏天一閣本」は４６２字あり、阮元が模刻を作ったが、原本は１８６０年、太平天国の乱で焼失してしまった。呉昌碩は本物を知らず、この阮元の模刻本で学んだようである。

その後、明代の富豪の安国が北宋拓の石鼓文を秘蔵していたことが分かり、上海で印刷された。安国は十種の北宋拓本を持っていたが、その中で特に優れたものが「先鋒本」「中権本」「後勁本」の三本である。現在この三本は日本の三井文庫の贓品になっている。二玄社で「中権本」が影印出版されている。

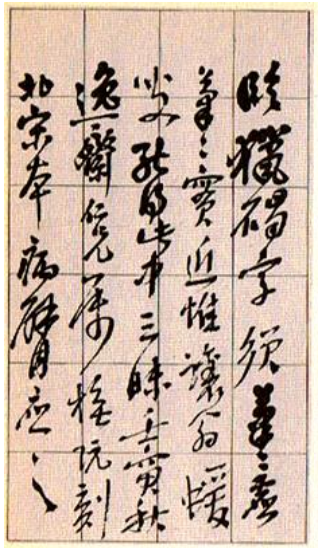
石鼓（第１鼓）

第１鼓の拓本

「中権本石鼓文」

「臨石鼓文」1902 年（59 歳）部分

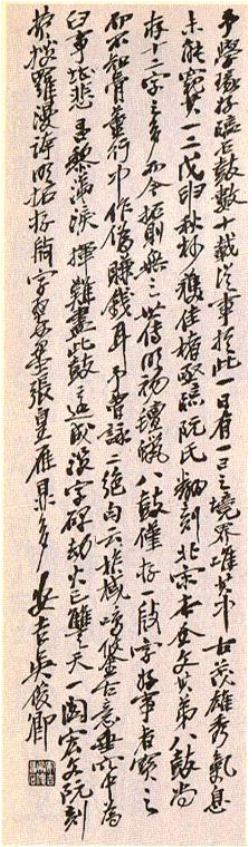
「吾車既工、吾馬既同、吾車既好、吾馬既缶、君子員邋、、々々員斿、麀鹿速々」　まだまだ原本に忠実に書かれている。



款識

款識；「猟碣の字を臨するに、すべからく筆々虚、筆々実なるべし。近ごろ惟うに、譲翁（呉譲之）、蝯叟（何紹基）よくこの中に三昧を得たり。・・・」

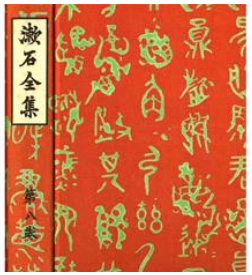
「臨石鼓文」1908 年（65 歳）部分



款識

「予、篆を学び石鼓を臨するを好み、数十載。これに従事し、一日に一日の境界あり。ただその中の、古茂雄秀の気息、未だその一、二を窺う能わず。戊申の秋の末、佳楮を獲、しばしば阮氏翻刻北宋本の全文を臨す。・・・」

60 歳代、呉昌碩は、いよいよ、独自の様式を確立していく。

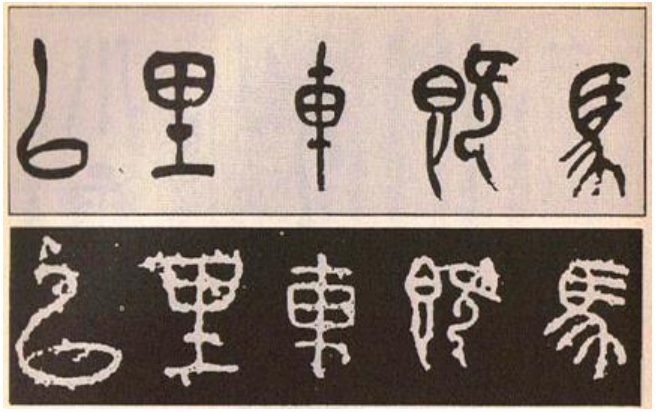


「漱石全集」の装幀にも「石鼓文」が使われている。
漱石は大正３年の橋口貢宛書簡で「石鼓文」の拓本を贈られ、「珍しく、面白い字で愉快です」と言っている。

夏目漱石の装幀した『心』。「石鼓文」を使っている。
漱石は大正２年、橋口貢宛の書簡で呉昌碩の作を評して「文人画のアンデパンダンだから面白い」と書いている。

臨石鼓文　1909 年（66 歳）

分間布白の原理を否定し、石鼓文を構成し直し、運筆も速くし、篆書を行草化している。字間、行間を詰める印の構成法を応用している。縦画を上下に伸ばしている。



原拓本（下）と呉昌碩臨石鼓文の比較（王家誠氏による）

石鼓文の「馬」の横画は右下がりだが、呉昌碩は右上がり、または水平に書いている。石鼓の「既」は偏と旁を水平に揃えているが、呉昌碩は旁を上げて、偏を下げている。石鼓の「車」や「里」の「田」は方形だが、呉昌碩は晩年になるほど円形に近く書いている。また晩年になるほど、小篆のように脚部を長く伸ばして縦長に書いている。呉昌碩の「以」は上に向かって伸びている。

阮元の模刻した『范氏天一閣本』

呉昌碩の石鼓文は、生涯に、全臨5種と部分臨14点以上があるという。

70代以降、石鼓文を土台にした、独自の書風を創造した。

70代が最もエネルギッシュで作品数が多く、出来も良いといわれる。

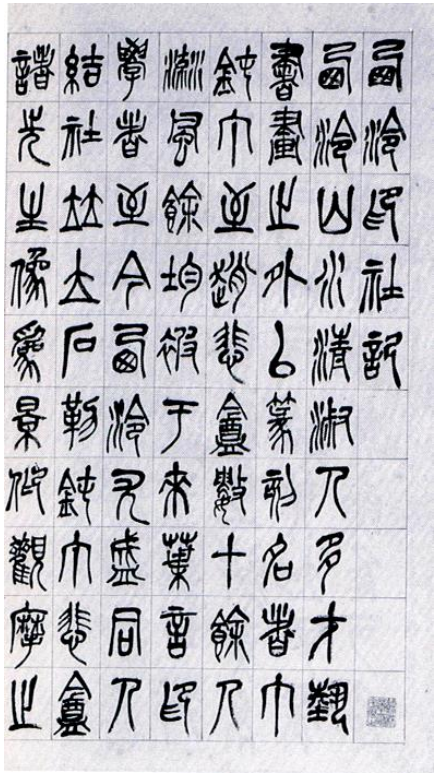
70代、80代と晩年になるほど、作品は深く冴え、その彫る線の鋭さと美しさは年とともに深まってゆく。

「西泠印社記」部分拡大　1914 年（71 歳）

洵雅　于六　官印　間以　有華　刀而

「西泠印社記」　西泠山水清淑　人多才藝　書畫之外　以篆刻名者　丁鈍丁至趙悲盦數十餘人。流風餘均　被于來葉　言印學者　至今西泠尤盛。同人結社　並立石勒鈍丁　悲盦諸先生像　爲景仰觀摩之（所）

呉昌碩が西泠印社の社長に選ばれた翌年に書かれた。4対3の比率の罫のなかに書かれている。蔵鋒、露鋒で自在に書かれ、肥瘦も自然な変化を感じさせる。篆書の行草体といったところか。



「西泠印社記」部分

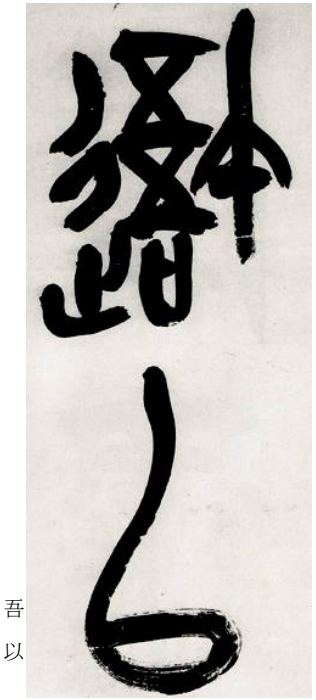
「臨石鼓文四屏」1918年初春（75歳）個人蔵

西園寺公望（号は陶庵）の依嘱による作品。

「田の車は孔だ安らかに、・・・」

64歳以前に、呉昌碩は石鼓文の全臨本を二部完成した。さらに、75歳までに二部の全臨本を完成している。さらに75歳のときに一部を全臨したらしい？その第五本の跋で次のように自己評価している。

「右、阮刻北宋本猟碣字を隣す。余、筆墨を以て計活を為し、日々之を為る。而して生平、全部を臨する所は、此れと僅かに四本有り。用筆は綿勁、吾が家山の呉讓之にくらぶれば、およばざる所あるに似たるなり。戊午秋仲、安吉呉昌碩、年七十有五。」



吾以

君子

酒樂

呉昌碩の点画は、彫るように書かれ、立体的である。

起筆は直筆蔵鋒が基本だが、たまには側筆露鋒になっても気にかけないようだ、しかし、送筆部は中鋒で運ばれているので、線に肥痩があまりない。

終筆部は押さえないで、止まったら、軽く上へ上げる。転折部はしっかりとつながれ、やや円味がある。

筆遣いも字形も垂直水平が基本ではあるが、全体に柔らかく、曲線的である。

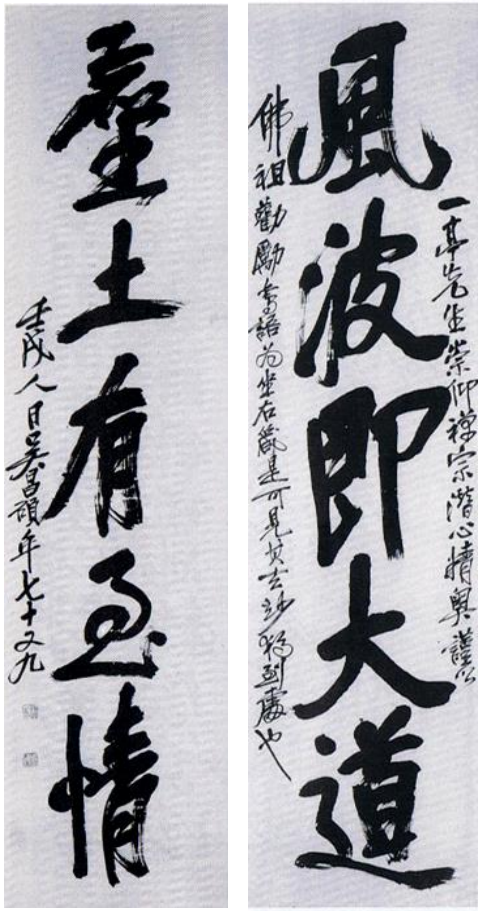
墨つぎも、一字の中であっても、墨がなくなれば、平気で墨つぎをしている。神経質なところはまったく感じられない。

篆書の運筆はゆっくり運ぶのが基本だが、呉昌碩の運筆は、やや速いようだ。速いが、沈着である。

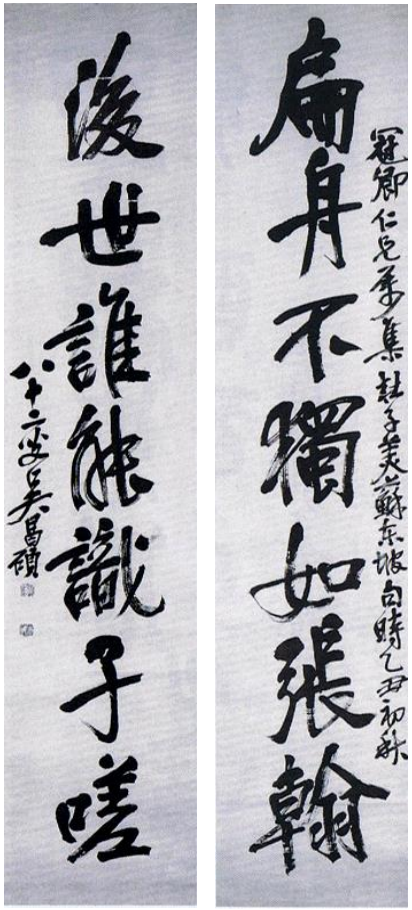
字の姿には、勁いだけでなく、温かい表情がある。しかし、温和なだけでなく、知的な構成美が文字を引き締めている。

「篆書如鉄」1926 年（83 歳）

「隷書五言聯」1927 年（84 歳）



「行書五言聯」1922 年（79 歳）



「行書七言聯」1925 年（82 歳）

「行草書画松七絶」
1926 年（83 歳）

超大筆で書かれた中堂。「中堂」とは客間の正面中央にかける軸のこと。

行書の跋には「用筆は鉄の如く、溌墨は潮の如く、錚々の鉄、茂々の毫。古の銘硯に、此の四語見ゆ。呉昌碩、年八十三、時に丙寅二月」とある。

呉昌碩は潤筆料には無頓着であったらしい。しかし、書画を求める者が五月蝿くなってきたので、やむなく、鄭板橋にならって潤格（価格表）を掲げて、安く買おうと考えている人が、あきらめて帰るようにした。

彼は文人と職業芸術家との間で、いつも悩んでいたようである。

行草書は石鼓文の筆意で書かれ、鋭く、張りがあり、力強い。篆意をはらんだ、強い右肩上がりの書である。

書画は、ただひたすら臨模するだけでなく、旅に出て自然に触れ、山水の美をみずから体験し、書を読み、古人に学び、気を満たし、そして、人生と芸術をたがいに結びつけることが重要なのだ。そうすれば、

「五嶽儲心胸　崢嶸出筆底」
五嶽　心胸に儲（たくわ）え
崢嶸（そうこう）として筆底よりい出（い）ず

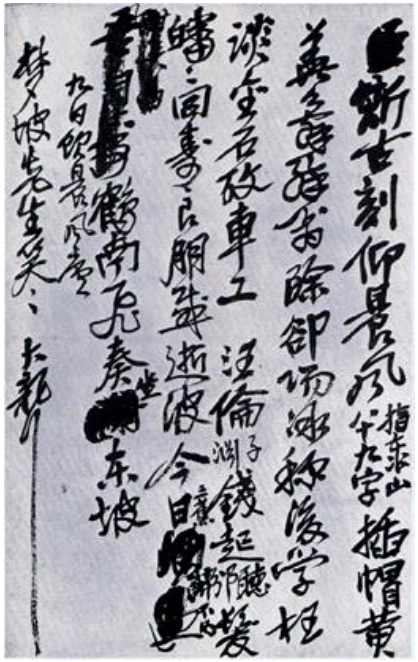
※崢嶸は高くけわしいさま。

という境地に、自然に到達することもできるのだ、と呉昌碩は友人に言う。

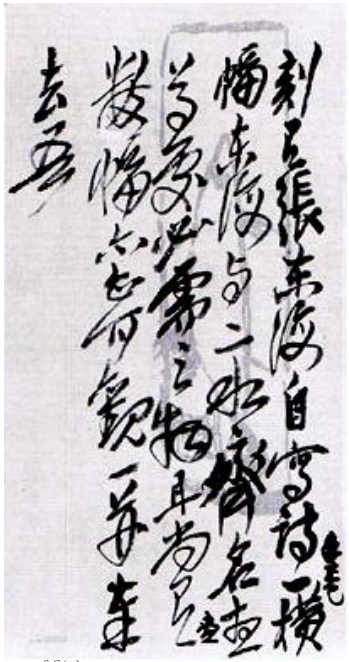
「臨石鼓文額」　1920 年（77 歳）台東区立朝倉彫塑館蔵

「行書王維五言句横披」1927 年（84 歳）　「萬事不関心」　個人蔵

款;「摩詰（王維）の句なり。扈（上海）に書す。呉昌碩、八十又四」



「詩稿」部分　日常の書



「尺牘」部分　日常の書

呉昌碩は、老病（腕、足、腰、耳、眼の病）や妻の医療費や息子の多額の借金、孤独やたびかさなる戦乱のなかでも、一貫して、時流に迎合せず、やや、反動保守のようではあったが、強いて古きを願いもしなかったし、伝統保守主義者でもなかった。

彼は、石濤や羅聘や徐渭や八大山人にあこがれ、彼らから大きな影響を受けている。彼らは、孤独な反骨の芸術家であった。呉昌碩にとって、現実ではなく過去の偉大な芸術家だけが、きびしい今を生き抜いてゆくための希望だったのではないか。

呉昌碩は過去に囚われていたわけではない。常に独創性を追い求めていた。

徐穆如は、『回憶呉昌碩』のなかで呉昌碩の思い出を語っている。

「先生の石鼓文は、どうして原本と違うのですか。すると呉昌碩先生は、

古人の書には優れたところと、そうでないところがある。古人を学ぶにはその長所を採り入れ、短所をすて去ることである。そうすることによってはじめて自己の様式ができるのだ。」

と教えられたそうだ。

彼は30代の時、印にこう刻した。

「今人　ただみだりに古昔を模す

古昔以上は誰か宗とする所ぞ」

今の人々は昔の作品を臨模の対象としているが、昔の人は誰を範としていたのか、と。

呉昌碩は「形似をもとめず」「想像力を働かせ」石鼓文を通して古代人の独創的な息づかいを感じていたのかもしれない。

呉昌碩の芸術は、すべて詩に由来し、彼の書画篆刻にはかならず詩意がそなわっているといわれる。彼は日記のように詩を詠みつづけた。

昭々と獲麟を談ず
履を著けて峨嵋に登り
水を飲みて崑崙に眠る
画境　誰か商量せん
隻手　星辰を捫ず

※「昭々」は明白なさま。「獲麟」は筆を絶つこと。
「著履」は、げたをはく。気ままな行為をいう。
「商量」は討論すること。「隻手」は片手。「捫」は取る。

呉昌碩の絵画（詩書画印一致）

題字部分

「牡丹図」1895 年（光緒 21、52 歳）東京国立博物館蔵

賛は行草書。王鐸の書風。後年の粘り強い線質や左右に大きくゆれる筆づかいがすでに見られる。

「墨葡萄図」1902 年（59 歳）東京国立博物館蔵

金石味を生かした独自の作風の始まりがみられる。

「桃実図」1907 年（64 歳）東京国立博物館

水仙怪石図　1918 年（75 歳）東京国立博物館蔵

呉昌碩は30代の頃、海上派の任伯年（にんはくねん）に画を学び、後に上海書画壇の領袖となった。

50代以降、独自の画風を創造した。

八大山人、石濤、張孟皐（ちょうもうこう）、徐渭、白陽、揚州八怪、張熊、呉譲之、趙之謙などの影響を受け、梅、藤、菊、牡丹などの花卉画が得意。

彼らが自然と伝統を範としていることを学んだが、呉昌碩は何ものからの拘束も受けなかった。

楷書、篆書の筆法を画の筆法に応用した。

彼は書の筆法と絵の筆法は同じだという信念を持ち、石鼓文や琅邪台刻石（ろうやだいこくせき）の篆法で描けば、自然をよく把握できると信じていた。

彼の絵画は金石書法による詩書画印の結合など、構図、筆法・設色など独特の画風である。着色法は赤、緑、黄の三原色を配するか、補色か補色に近い二色を配したり、墨色に一色だけ加えたりしている。

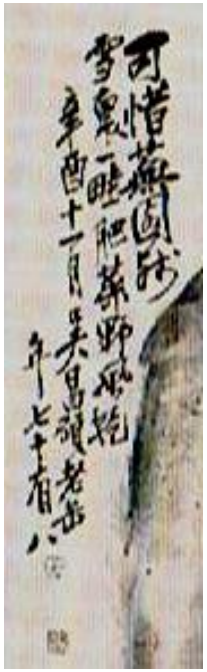
「古人を賓と為し、我を主と為す」

「古人に学べど古人に似ず、自然に学べど自然に似ず」が彼の理想境であり、生涯をかけてそれを追求した。

「不似の似」ともいう。

「柳雀」部分
(題) 不行書案栖　楊柳鳥　亦傷春　怨別　離缶

「柳雀」1927 年（84 歳）中国美術館蔵　紙本水墨
30.7×36.3 ㎝　　「山水花卉冊」12 開の４



「菜根図」跋

「菜根図」1921 年（78 歳）

「珠光」款識部分

「珠光」1920 年（77 歳）中国美術館蔵
139.5×69.5 ㎝　紙本　水墨淡彩

篆隷の筆法と狂草の旋回する線で描かれている。「書法による演画法」。

詩書画印一致の考え方は、明代の文彭あたりから、近代篆刻の始まりとともに始まったようである。考証学の一環として金石学が勃興し、金石学の粋として石の方寸の世界に結晶化した。

書は毛筆による表現から刻画表現へと変化し、篆刻が書画の要となり、書画の造形に影響していったのである。

呉昌碩は「菜根図」をたくさん描いている。これは、水墨の白菜と、墨に淡く黄色をにじませた石が描かれている。上方に題と跋が書かれている。

題には「菜根をかみ得れば、百事為す可し。大聾」

跋には「惜しむ可し、蕪園、残雪の裏、一畦の肥菜、野風に乾く。辛酉十一月、呉昌碩老缶年七十有八」

これは真冬の上海で描かれた。「蕪園」は戦乱のあと生き残った父と二人で暮らした故郷の家園である。

この作品には、激しい望郷の思いが造形されている。

呉昌碩の創造力は加齢とともに増大し、衰えることがなかった。